強盗犯を追い詰める

器用貧乏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

強盗犯を追い詰める

【Nコード】

N83310

【作者名】

器用貧乏

【あらすじ】

芝井探偵第4弾。今回は本気で頭脳労働。追う者と追われる者の思惑が交錯する本格ミステリ。

プロローグ

暇だ。芝井は高く上がった太陽を、眼を細めながら窓越しから眺めていた。

ここ数日は誰とも話していない気がする。新田は忙しいのか、あの殺人事件以来連絡は無いし姉の里美と姪の直美からも音沙汰なし。この事務所だけが現世から隔離され浮世の世界に存在しているのではないか、との錯覚さえ起こしそうだ。

「コーヒーでも飲むか」と独りごちた。本日何杯目のコーヒーだろうか。これが酒だったら完全にアルコール中毒で、それこそ本当に浮世の世界へ旅立っていたらだろうか。ふっと鼻を鳴らして首を振った。

「プルルルル」

コーヒーカップを片手に椅子に座ろうとした瞬間、電話のベルが鳴った。この前は、電気料金督促の電話だったな。今回は、はたして俺を社会復帰させてくれる幸福の音となるのだろうか、などと考えつつ受話器を取った。

「はい、芝井探偵事務所です。」

「久しぶりだな、元気か？」

「新田か、忙しそうだな。」

これで少しは救われそうだな、という感触を得た。新田が連絡してくることに、すなわち何らかの事件が発生したことを意味している。

「ん、まあな。警察が暇だったら平和な世の中で良いんだけどな。」

新田はのんきな口調で返事をする。

「お前、今大丈夫か？ちよつと難航しそうな事件があるんだ。また

“ふみ”まで来てくれないか。」

“ふみ”とは懇意にしている馴染みの喫茶店の名前で新田と話をするときには頻繁に利用し、マスターとも相性が良い。

「ああ、いいよ。こつちもちょうど事件が片付いたところだ。」

「へえ、どんな事件だったんだ？差し支えなければ話してくれないか？」

新田が興味を持ったのか、詳細を尋ねてくる。

「あるコーヒー中毒の男を社会復帰させる事件だ。」

新田が受話器越しに「コーヒー中毒」と小声で呟くのを聞いた。

『？』が頭の上でグルグル回っているであろう新田をよそに、ククツと笑って「今からそっちに行く。」と言って受話器を置いた。

事件概要

ふみに着くといつも窓際の席に座っていた新田が手を挙げて合図した。芝井はマスターに挨拶し席に着いた。

「いやあ、まだ昼間だと暑いくらいだな。歩いてると汗が出てきた。」

世間話から入って新田の様子を伺った。

「そうだな。まあ、今流行の地球温暖化ってやつじゃないか。そういえば今年は猛暑だっただろ、夏が長引いた分秋がかなり短くなるんじゃないかってニュースでやってたよ。」

のんびりした感じで新田が言う。電話では『難航している事件』と言っていたが、その割りには新田はそれ程深刻そうでもない。もともと楽観的な奴だから表情や態度では判断が付き難い。直接聞いてみるか。

「今度はどういう事件なんだ？電話では何かややこしそうな事件とか言っていたが。」

「うん、ややこしいと言うか、不可解というか、何とも説明しづらい事件なんだ。」

渋い顔をしながら答える。

「ふうん、じゃあその説明しづらい事件の詳細を説明してくれるかな。」

揶揄したつもりだったが、いつもの通り新田は気付かない。まあこれもいつも通りか、と苦笑いしながら耳を傾けた。

先週の水曜日、2丁目の銀行に強盗が押し入った事件を覚えているか？まあテレビでも取り上げられていたからお前も事件の内容ぐらいは知っているだろう。その銀行で約2000万円の現金が盗ま

れた。犯人は現金を奪った後、車で逃走。直後に行員から通報を受けた警察は犯人が逃げた方向を中心に車の行方を追った。正直、袋のねずみで犯人は直に捕まると思っていたんだ。というのも、逃走する際、行員は犯人の車がA県の地方ナンバーであることを確認しているんだ。当然犯人もそっちの方へ逃げている。ここからA県に行くには5・6km先にある大きな川を渡らなければ行けないのだが、そこに架かっている橋の数はそんなに多くない。つまり橋を張って該当する車を片っ端から調べれば犯人を確保することができる、ということになる。しかし見つけることはできなかった。

ここで考えられることは二つ。一つは犯人は捜査の網をかいくぐって橋を脱して逃げた、もう一つはまだ県内に潜んでいる、この二つだ。俺たちは同時進行で内外の捜査をして、昨日橋の内範囲の車の確認が終わった。結果は該当車無し、だ。従って、犯人はすでに県外に逃走したということになり、今はA県を中心に捜査の手を広げているが今のところ有益な情報は集まっていない。

「とまあ、概要はこんなところだ。」

ここで新田が一息付いた。芝井はマスターに2杯目のコーヒーを注いでもらって香りを楽しんでる。一口飲んでコーヒーカップを置くとおもむろに口を開いた。

「いくつか質問していいか？」

「ああ。」

新田は芝井の推理を記録するために手帳を開いた。

「橋に行く途中で車を乗り換えたって可能性は？」

「ないな。それなら昨日橋の内側の捜査終了段階で何らかの報告があるはずだし、川や池に沈めて隠したということもない。」

「行員が見た車なんだが、A県の地方都市というのは分かったが、数字の方は確認しているのか？」

「うん。それなんだが、ナンバーの方は確認できなかったらしい。行員が車を見た瞬間に急発進して逃走したらしいから数字の方は読み取れなかったみたいだな。地方都市というのも最初の一字だけを確認しただけで、全部見えたわけじゃないらしい。しかし、A県にその地方都市ナンバーは存在するし、他の県では使用されていない文字なのでその都市ナンバーであることは間違いない。」

「ふうん、それで難航しているわけか。まあ、今のところお前が言うように橋を張っていた警官の見落としていう可能性が一番高いな。」

髪を指でクルクルともてあそびながら芝井が言う。

「やっぱりそう思うか？しかし俺もその警官たちに話を聞いたんだが、皆真面目でしっかりしていて見落とすなんてことないと思うんだけどな。」

新田がそう口にするのを聞いた芝井は苦笑いを浮かべた。一目見ただけで真面目、真面目じゃないなんてことが分かれば、この国の犯罪検挙率は格段に上がって治安も劇的に向上していることだろう。人間は表裏の顔を持っているからこそ犯罪が起きるのだ。つまり先程新田が言った言葉は願望であり何の根拠も説得力も無い。まあ、身内を庇いたい、という気持ちは十分理解することができるが。

「今のところは、だ。何にしても情報が足りな過ぎる。事件から一週間経っているってことは関係者の聞き込みは済んでいるんだろ？」

「ああ、一通りは済んでいる。橋を張っていた警官、車のナンバーを見た行員、後は目撃者、この三者を重点に聞き込みを行った。」

「じゃあ、次はその話を聞かせてくれ。」

芝井は3杯目のコーヒーマスターに注文した。

聞き込み1

事件翌日。新田は自分の机で予定を確認していた。事件関係者の聴取、スケジュール蘭はその一言で完結されていた。

「手っ取り早い順からやった方がいいだろうな。まずは、橋を見張っていた警官たち。身内の腹の中をほじくり返すのは何ともやりきれないが、話は聞いておかなければならない。数人いるだろうから連絡を取って集まってもらおう。次に逃走車のナンバーを見たという行員。この供述がこの事件の核になるだろう、なんと行っても犯人を見ているんだから。最後に、逃走車を見た、と言っている目撃者。名前と住所は、控えてあるから大丈夫だな。」

パン、と勢い良く手帳を閉じて、立ち上がった。

「ええと、左から高平信吾巡査、奥良平巡査、大山実巡査だね。話を聞かせてもらおうよ。」

見たところ、いずれも警察官になってそれほど経っていないのだろう、初々しさが残っていた。三人は一樣にしょぼく暗い雰囲気、に包まれている。それもそのはず、橋の内側も捜査してはいるが、すでに大多数は犯人が外に逃げたという意見で統一されている。犯人が逃走した直後に通報を受けて三人は橋に向かった。それぞれが橋に近い派出所の巡査であるから、橋に辿り着くのに5分もかからないだろう。襲われた銀行からそれぞれの橋まで約5km、時速50kmで走行したとしても6分かかる。途中何個か信号があるし他の車の往来もあるので、実際はもっとかかっているだろう。しかもこの間、信号無視やスピード違反で捕まった者はいないし、そのよくな目撃情報もない。つまりこの三人の内の誰かがヘマをして犯人を見逃したのだ、という空気が漂っているのだ。しょぼくれるのも

無理はない、ここはやんわりと話しを進めるのが上策だろう。

「まあ、そんなに落ち込まないで。俺は他の刑事と違って、君たちが忠実に任務を果たしてくれたと信じているから。」

先輩風を吹かせて慰めたが、三人はうつすら笑みを浮かべただけで表情は冴えないままだ。まあ仕方ないだろう、これですぐに立ち直った方が警察官として問題だ。事件の話をした方がかえって落ち着くかもしれない。

「一度に話されても困るから、代表して高平巡査が俺の質問に答えてくれ。それで個々に付け加えることがあれば、その都度口を挟んでくれればいいから。」

三人は一斉に首を縦に振る。

「まず、通報を受けた状況から聞かせてくれ。」

「はい。派出所で待機していますと電話が鳴り、近くの銀行で強盗事件が発生し犯人が逃走しているとの報告を受けました。併せて誰かを近くの橋に向かわせるようにとの要請も受けました。その際、白のワンボックスカーでA県の地方都市ナンバーである、との情報ももらいましたので該当車を発見し次第確認しようとしたのですが、A県ナンバーの車自体通りませんでした。しかし、もしもということがあるので白いワンボックスカーも止めて話を聞きましたが、特に問題無かったのでそのまま通しました。」

高平はハキハキと説明する。

「他の二人も似たような報告だったんだな？」

大山は明確に肯定する返事をしたものの、奥は首を傾げていた。

「どうした、奥巡査？何か言いたいことでもあるか？」

新田は奥が何か納得のいかない表情をしているのを見て問い質した。

「そのことなんですけど、私が報告を受けた逃走車の情報は『黒のワンボックスカー』と言っていたような気がするんです。けれども実際は『白』だったわけですよ？まあ『しろ』と『くろ』では一字違いですし受話器越しの声ですから私の聞き間違いだとは思って

ですけど」

「それじゃあ、『白のワンボックスカー』を見逃した可能性が出てくるじゃないか！」

「つつい大声を上げてしまう。縮こまってしまった奥はそれと反比例して声が小さくなってしまう。」

「いえ、それはありません。私も手違いがあつてはいけないと思い、色やナンバーに関わらずワンボックスカーを止めて確認しましたから。交通量もさほど多くなかったので漏れは無いと思います。」

それを先に言えよ、新田はそう言いながらため息をつく。

「じゃあ、他に変わったことはなかったか？これは逃走車でなくても構わない。何か不審車がいたとか気付いたこととかでもいい。」

三人は揃って考え込んではいるが、結局何も出て来なさそうだ。

まあ、そりゃそうだろう。ただでさえ血眼で該当車を探している時に、他の事に気付くなんてベテランでも難しい。

「まあ今ここでつていうわけでもない。何か気付いたことがあつたら小さなことでも報告してくれ。」

はいっ、と大きな声で返事をしたのを終わりの合図として新田は三人に背を向け、次に行く銀行の場所を確認してから歩き出した。

振り返ると、三人が直立不動で見送っている。俺にもあんな時代があつたのかな、などと思い返し自然と笑みがこぼれた。

聞き込み2

「え」と、ここは真直ぐだな。あつ、やっぱ左だったか。」

相変わらずの方向音痴ぶりを發揮している新田は、カーナビ買つて下さい、と上司に直訴しようか真剣に悩み始めていた。今日中に全部回れるかな。関係者から話を聞くより運転時間の方が圧倒的に長い状況に、自分でも若干呆れつつも疲労は確実に蓄積されていく。

「お、ここが駐車場だな。」

大きな看板に銀行名が記されていたので見逃さずに済んだ。一番隅に車を止めて、銀行内に向かう。途中どこからかキンモクセイの良い香りが鼻をかすめていった。もう秋なんだな、感慨深げに周りを見渡しながら歩いていった。

「すみません、警察の者なんですけど宇田華子さんお願いできますか？」

警察手帳を見せながら、受付嬢に尋ねた。

「はい、少々お待ち下さい。」

女性が奥の部屋に入って一分近く待った後、もう一人の女性を連れてやって来た。

「宇田ですが、何か？」

少々疲れた様子で話す。

「昨日起きた強盗事件につきまして、もう一度お聞きできたらと思っております。」

出来るだけ丁寧に話す。昨日うんざりするほど同じことを聞かされているのは十分承知しているが、重要な供述に対しては本人から

直接聞いておきたい。そして、情報を引き出すのも大切な仕事だ。

「はい。では奥の部屋へどうぞ。」

言葉こそ丁寧だが、その表情はまたか、という顔をしている。しかし我慢してもらうしかない。たとえ我々が疎まれようと犯人逮捕という結果が最良の答えであり、それで関係者、特に被害に遭った人たちの気が少しでも晴ればそれが一番なのだ。

応接室のような部屋に通された後、出されたお茶を固辞し早速本題に移った。

「昨日もお話しになったと思いますが、今一度だけ状況をご説明頂けますか？」

「別に構いませんけど、昨日別の刑事さんに話した内容と変わりませんよ。」

「はい。それで結構です。」

新田は手帳の準備をした。

「昨日、私が受付を担当していたときに目出し帽を被った人が私の前に立って、ボイスレコーダーのようなものを突き出してきたんです。数秒後にボイスレコーダーから『金を出せ』という声が聞こえて、その人を見ると手にナイフを握っていました。私は主任に目配せをして、お金を用意してもらいました。お金をバッグに詰めて渡すと、それを奪って車に乗り込みました。私はすぐに外へ出ましたが、ちょうど動き始めたところでナンバーの一部しか確認できませんでした。銀行内に戻ると、もう警察には連絡してくれてみたいので、後は警察が到着するのを待つていました。」

さすがに何度も同じことを言ってることだけあって、淀みなく言葉が流れている。

「犯人は一人？」

「私が見たのは一人です、車の中にいたりしたりしたら分かりませんが。ただ運転もその人がしてましたし、やっぱり一人なんだと思います。」

「何か特徴みたいなものはなかったですか？」

「特徴と言われましても、全身すっぽり衣類で覆われていたもの
すから分かりません。」

宇田は困ったような表情をする。

「そうですね、では質問を変えましょう。犯人は男でしたか？」

「たぶん男だったと思います。」

「なぜそう思われるのでしょうか？」

「服を着ていても骨格といいますが、ゴツゴツしている印象でした
ので。あっ、あと胸の膨らみもそこまで印象に残りませんでしたし。」

「なるほど。身長と、あと体型はどうですか？」

「身長は165cmから170cmくらいで、痩せても太ってもな
かったと思います。」

「うーん、現状では性別は判断しかねるな。目撃者の印象は大切だ
が、それに囚われ過ぎると目測を誤ってしまう。客観性を重視せね
ば。」

「ボイスレコーダーの声は男性の声でしたか？」

「はい。男性の声でした。抑揚のない声でしたので特徴などありま
せんでした。」

これは昨日の警官が確認済みなのか、うまく内容をまとめてくれて
いる。宇田が気を回してくれているのか、早く話を切り上げて欲
しがっているのか。まあどちらにしろお互い効率良くやり取りでき
るのなら文句はない。

「他に何か変わったこととか、気付かれたこととかございませんか
？」

「気付いたことと言われましても」

宇田は俯いて何か考え込んでいるふうにも見える。

「どんな些細なことでも構いません。それが犯人逮捕につながるこ
とだってあります。何か思いついたことがあるのなら、お話し願え
ませんか。」

新田の押しが効いたのか、宇田は重そうに口を開いた。

「これは、昨日の警察の方には言っていないんですけど、別に故意に隠していたとかではなく、馬鹿にされそうで言い出せなかったんです。犯人を追って外に出たとき、私から見て右斜め前に車が停まっていたんですが、一瞬運転席の犯人と目が合ったように感じました。もちろん目出し帽を被っていますから絶対そうだったかと言われれば確証はありませんが、あっと思った瞬間にはもうすでに車は勢いよく出て行きました。」

目が合ったか、取捨の判断が難しい情報だな。新田は小さく唸った。

「いや、これは大変有益な情報です。また何かお気づきになられましたら、どんな小さなことでも結構ですのでご連絡下さい。」

なるべく愛想よく話しかけると、役に立ったのが嬉しかったのか初めて笑顔を見せた。これで、また何か気付いたら連絡してくれるだろう。最後に一礼して銀行を後にした。

まだ糸は絡まったままで突破口の入り口すら見つかっていない。これはあいつ向きの仕事かもしれない、との思いが頭を掠める。一連の聞き込みが終わったら、連絡してみるか。新田はひつじ雲の中に、コーヒー好きの友人の顔を思い浮かべていた。

聞き込み3

最後は事件発生直後に走り去る車を目撃した人物の聞き込みだな。確か、ここから近いはずだから歩いていこうか。

新田は地図を開いて目的地を確認し目を右に左に移しながら歩いていった。大通りから少し外れると、築年数の古そうな建物が目に付くようになる。まだこういう平屋のアパートとかがあるんだな、などと考えながら歩いていく。

「あつ」

新田が目をやった先には、小さな子猫が新田の方を見ていた。新田は猫好きである。何か気を惹く物ないかな、ポケットの中をゴソゴソしている内に親猫がやって来て、敵意剥き出しの表情で睨んでいる。そんな眼で見るなよ、新田は出来るだけ友好的な雰囲気を作し出そうとしたが親猫には全く伝わっていないかったようで、しばらくすると親猫が子猫に合図し並んで去って行ってしまった。ちえつ、俯き加減でとぼとぼ歩いていたら目的地を通り過ぎる寸前だった。『佐野昭二』と門柱に掲げてある表札を確認した後、呼び鈴を鳴らした。

「お忙しいところ申し訳ございません。警察の者なのですが佐野昭二さんはご在宅でしょうか？」

出てきたのは60代後半ぐらいの男性。見事な禿頭だ、などと変な所に感心してしまった。

「俺だが。ああ、昨日のあれか。あの、あれだろ。あれのことを聞きに来たんだろ？」

「やたらと指示語の多い老人だな。一抹の不安がよぎる。」

「そうです。あなたが逃走した車を見た、という情報を得まして今

日参った次第です。」

出来るだけ分かり易い言葉で簡潔に話そう、と新田は考えた。こういう人に小難しい専門用語や長い話はご法度だ。正確な情報を手に入れないと、ここに来た意味は無くなる。

「そうだろ？だって俺が連絡したんだから。善良な市民としては協力せずにはいられないからな。」

佐野はにやつと笑った。

「ありがとうございます。では早速本題に入らせて頂きたいのですが、どういう状況で逃走車を目撃したんでしょうか？」

「どういう状況？ビューンって逃げる車を見たんだよ。」
「しまった、分かり辛かったか。新田はどう噛み砕いて説明しようかと頭の中をフル回転させた。

「すいません。質問を変えさせて下さい。佐野さんは事件発生時間は何をしているところだったんですか？」

「何って、スーパーで買い物したあと家に帰る途中だったよ。」
「その時に逃げた車を見かけたと？」

「そうそう。そうだと思うんだよ。何やら騒がしいからそっちの方を見てみると、俺の方に車が猛スピードで向かってくるんだよ。うわあ、って思ったんだが、俺を轢こうとかじゃなくてただ十字路を曲がりたかっただけみたいだな。ギョんっていう感じで曲がったあと走り去っていったよ。車を通った後にビシビシッと小石が何粒か当たって痛かったの何のって。」

「何色でどんな感じの車でしたか？」

「白色の、ワンボックスって言うの？大き目の車だったな。」

この老人が見た車は逃走車で間違い無さそうだな。

「あなたの前を通り過ぎたとき、何か見ませんでしたか？犯人の顔とか。」

「さつきも言ったけど、そのときは俺を轢き殺すつもりじゃないかっていう感じで向かってきたから通り過ぎる瞬間は目を瞑って見てねえの。だいたいあれだろ？ニュースでやってたけど、犯人は覆

面してたんだろ？だったら仮に目を開けていたとしても分からねえんじゃないか。」

老人は話しているうちに熱くなってきたのか、語気を強める。

「そうですね。では、車のナンバーとかも確認できなかつたですよ
ね？」

「うん、速かつたからね。けど俺も暇だし、興味あつたから少し走
つて追いかけたんだよ。まあ、相手は車だから追いつくはずはない
んだけど。車が曲がつた角まで行ったら遠くの方で車を見つけたよ
もう豆粒ぐらいにしか見えなかつたけど、スピードは出てなかつた
な。なんで分かるのかつて？だつて他の車に追い抜かれてたのを見
たからよ。他の車がスピード違反なら知らないけどな。」

「うん、既出の情報しか手に入らないか。新田は話しを切る上
げることにした。」

「いや、今日はありがとうございました。又何か気付いたことがあ
れば遠慮なくご連絡下さい。」

佐野老人はあまりにあつさりした新田の対応に拍子抜けしたのか、
「こんなんでいいの？」と聞いていたが、新田は愛想笑いを作つて
お辞儀をして、駐車場へと歩いていった。

「3人の話はこんなところだ。これらの話と昨日終わった橋内側の
捜査の結果を踏まえて外部という意見が決定的となり、今はA県を
中心に捜査をしているつてわけだ。」

進展しない捜査を思い出したか、深いため息を漏らす。芝井はい
つもの通り指で髪の毛をクルクルつともてあそびながら一点を見つ
め集中しているようだ。今回も一休張りの閃きが出てくることを祈
りながら芝井が話し始めるのを待った。

「なるほどねえ、すると警察はもう橋の内側を捜査していないん
だな？」

十分ぐらい待っただろうが、芝井がゆっくりとした口調で話し出す。

「そりゃ、そうだろ。全て捜査し終えた結果が出たんだから。当然、といった口調で断言した。」

「新田、喜べ。お前に手柄を取らせてやる。」

芝井はそう言つと、不敵な笑みを浮かべ新田と目を合わせた。吸い込まれるような目だな と、新田は変なところに感心していた。

推理 1

「どういうことだ？」

わけが解からない、といった様子で聞く。が、芝井は笑みを浮かべて何も話そうとしない。相変わらず難しい奴だな、この瞬間が最大の楽しみのような顔をしてやがる。けど、ここで機嫌を損ねると推理が聞けなくなる。悲しいが俺に選択肢はない。

「なあ、どういうことか教えてくれよ。犯人が分かったっていつのか？」

懇願するような言葉遣いで尋ねる。芝井は満足したのか、ゆっくりとした動作でコーヒーを飲んで口を湿らせてから話し始めた。

「今出た情報だけで『こいつが犯人だ』って判ったら、それこそ神の御業だぜ。神様なんてこれっぽっちも信じちゃいないが。だが、一連の話を纏めると橋の内側に犯人がいる可能性は極めて高い。」

「その根拠は？」

急いで手帳を開けた。

「まず大前提として、計画的犯行である、ということだ。覆面にしてもボイスレコーダーにしてもナイフにしても、今日強盗をするぞ、という意思を持って準備しないと無理なことだ。これは当たり前のことだけだな。しかし、基本を見失うと本質をも見失ってしまうことが多い。犯人は色々な罠を仕掛けることで、その基本を見失わせようとしたんだ。」

「罠？」

「順を追って説明しよう。まず、銀行員が犯人と目が合ったこと。

正確に言うと、『目が合ったと思う』だな。」

「単なる銀行員の思い込みだろ。」

自身の説を強調する。

「もちろん、そうとも取れる。が、この話が事実とするならば『犯人が追ってくる銀行員を待っていたのかもしれない』という可能性

が浮上してくる。」

「なんで待つ必要があるんだ？少しでも早く逃げなきゃいけないだろう。」

「例えば銀行員に車の大きさや、それこそナンバープレートを見せる為、だとしたら？」

「はあ？それが分かっちゃったら一瞬で捕まっちゃうだろう。」

自然と声が大きくなってしまふ。さすがにこの説には賛成し難い。しかし、芝井は涼しい顔をしている。

「だが現実はどうだ？犯人が捕まらないどころか、その糸口すら見つけられない状況じゃないのか？」

ぐぐぐ、反論できない。唇を噛んだ。

「まあ、焦るなよ。そんな調子じゃ俺の推理が終わる前に気絶して救急車呼ばないといけなくなってしまう。」

芝井の皮肉が胸を刺す。もう気絶しかかってるよ！と主張したくなる。

「次に、派出所に掛かってきた電話だ。二人の巡査の話は一致していたが、あと一人、奥巡査だったか、の話に若干の食い違いがあった。」

「ああ、逃走車の色か。確か奥巡査だけ『黒』だと聞いたかもしれない、と言ってたな。けど。」

話しの途中で芝井が言葉を遮った。言いたいことは分かっている、ということか。

「そう、本人も言うように聞き間違いだった、ということも十分考えられる。しかし、本当に電話の相手が『逃走車の色は黒である』と言っていた可能性も残されている。」

「警察が誤報を発してしまった、ということか？」

心外だ、という表情で芝井を見る。

「いや、そうじゃない。奥巡査のところだけに、犯人が電話を掛けたんだよ。銀行から警察へ連絡がいくことも、A県に逃走しようとするならばルートが限られ警察がそこを封鎖してくるだろうという

ことも、容易に想像できる。そこで橋の一番近くにある奥巡査のいる派出所にだけ間違った情報を流したんだ。それを信じた奥巡査が黒のワンボックスカーを追えば、実際には白のワンボックスカーだった犯人の車は普通に橋を渡ることができ、結果犯人を見逃してA県に脱出させてしまった、という構図を作ることが出来る。」

「ううん、理屈では分かるが実際そう上手くいくもんなかな。」

自信なさ気に抵抗してみるが、芝井はそれを無視し話しを続けた。「しかし、ここで誤算が起こった。それは、奥巡査が『黒』と『白』を聞き分けられずに両方の色に対して検問を行った、ということだ。他の二人のところにはA県ナンバーの車すら通らなくて、なお且つ、白いワンボックスカーまで止めて検問している。つまり、これでは犯人が県外へ脱出する術は無く、かえって『橋の内側範囲に犯人がいる、という可能性しかなくなってしまった』と言わざるを得なくなる。さらに」

「ちょ、ちょっと待ってくれ、一旦一息入れよう。」

このままだと本当に気絶しかねない、なんてことを芝井が察してくれたとは思わないが、「そうだな。」と俺の案に賛成し、コーヒーのおかわりを注文した。

推理 2

新田はコーヒーを啜った。はあ 生き返るな、まるで今まで死にかかっていたかのような口ぶりだ。実際芝井の推理により、今まで行ってきた捜査の根本が覆されようとしているので精神的には虫の息なのだが。しかし、そんなことも言ってもらえない。一日も早く事件を解決することが俺に課せられた使命であると信じて行動するしかない。

「よし、今までの話は何とか纏めたよ。続きを聞かせてくれ。」

暇だったのか、マスターと話していた芝井はクルツと姿勢を変えて俺の方を向き、話す態勢を整えた。

「どこまでいったかな」と首を傾げるので、

「奥巡査の話で『犯人が橋の内範囲いる』と推理したあとからだ。」と、手帳を見ながら答える。

「ああ、そうだった。さらに、犯人が橋の内側にいる、という推理を補完する情報もある。それは佐野氏が見た『逃走車は他の車に追いつかれていた』という話から導き出すことが出来る。仮に犯人がA県に脱したいと思うのなら、それこそ信号を無視してでも猛スピードで逃げなければいけないだろう。脱出できるルートが限られているのならなおさらだ。しかし、犯人はスピードを落している。なぜか？急ぐ必要がないからだよ。もつと言うと『橋を通過する必要があるから』だ。犯人は銀行から逃げる瞬間は猛スピードを出している。これは銀行員に急いで逃げようとしている、ということ的印象付けるためだ。そして、角を曲がったあとはスピードを落とす。他の車に紛れようとした。ここで速度を上げたり信号を無視したりして警官に怪しまれたら、元も子も無いからな。」

「ううん、犯人はそこまで考えていたのか。」

「だから初めに言っただろ？これは『計画的犯行』なんだって。犯人は、覆面等の物理的な計画だけでなく、俺たちの心理を逆手に取

るような『罫』まで計画的に仕掛けていたってことさ。」

芝井はしたり顔で、サラリと言つてのける。

「事件から一週間経つていふことは、犯人はもう証拠、いや車すら処分している可能性もあるな。」

そうなつては打つ手無しだ、新田は頭を抱えた。

「いや、それは無いな。今回の犯行は馬鹿では出来ない。報道ではA県を中心に捜査をしていると放送されているが、橋の内範囲の捜査を打ち切つた、とは言つていない。それに犯行が行われて間もないのに近くで不審な行動を取れば、それこそ警察に目を付けられてしまう。このような計画的犯行を行つた犯人が、そんな愚を犯すはずは無い。覆面やナンバープレート等の小物類は処分できたとしても車までも処分したとは考え難い。つまり、犯人はまだ『逃走車を所有している』可能性が高い、ということだ。しかも怪しまれないために、大掛かりな塗装やタイヤ交換も出来ず、犯行当時のままで保管されている可能性すら残されている。」

「そうか、そうだよな！」

息の根を止められかけていた新田は、一転息を吹き返したように大声を張り上げ、拳を握り締めた。

「でも、どうやって犯人を捜し出せばいいんだ。」

再び悩み始める。すると芝井は、頼杖をつき窓の外に広がる景色を見ながら言つた。

「お前、『策士策に溺れる』つていう言葉知つてるか？」

「はあ？」

急に訳の分からないことを言われ、声が上がつてしまった。

「中途半端に策を弄した奴は、かえつて策に足を引っ張られてしまつてことだ。わかるか？この事件の犯人はすでに溺れかけているんだよ。」

芝井はこちらを向き、フツツと屈託のない笑顔を見せた。

聞き込み再開

次の日、新田は朝から聞き込みに出かけていた。あの後芝井には、二点を踏まえた上で橋の内範囲の捜査を行うよう告げられた。まず、署内で行った捜査の情報を確認し白のワンボックスカーの持ち主を割り出し、その家を訪れて話を聞く。その際、捜査の詳細は述べず、適当にはぐらかしておく。二点目は、車の特徴や気付いた点をその場で細かく記録しておく。

どちらも捜査の基本ではあるものの、捜査の詳細は『適当』でいいのに、車の特徴は『その場で細かく』記録しなければいけない所が何か引つかかるな。まあ、芝井の言うことが全く的外れだとも思わないので、言われた通りにやってみよう。

捜査資料を確認すると、該当する車は34件。全てが近場であることから、持ち主に接触できれば今日一日で終わるだろう、などと思いつながりながら歩いているうちに一件目の家に辿り着いた。白いワンボックスカーがあることを確認してからインターホンを押した。

日が落ちてもう何時間になるか。外灯の薄暗さが風の強さと冷たさを増加させる。

「ここが最後の34件目か。」

高木、と掲げられた表札を見て疲労と安堵の入り混じったため息を吐き、インターホンを鳴らす。ペットにじゃれつかれたり、長々と話されたり、逆に黙っているのを無理やり話させたり、色々大変な作業だった。不在の家も5件ほどあったが、それは改めて明日訪れるしかない。とにかくこの家で今日は終わる。

「はい、どちら様ですか？」

野太い声の男性が出てきて、怪訝そうに新田を見る。

「夜分遅くすみません、新田と申します警察の者ですが。先週この近くで起きた強盗事件について、少しお話しを聞かせて頂きたいのと車を見せて頂きたいのですが。」

「えっ、あつ、はい。」

高木は驚いた様子で返事をする。

「先週近くで強盗事件があったのは知っていますか？」

「はい。ニュースで取り上げられていましたから。」

「事件当日、え、先週の水曜日になるのですが、どこで何をしていましたか？」

「先週の水曜日 今すぐに思い出せ、と言われても正確なことは分かりませんが、多分家に居たんだと思います。」

「犯行時刻、午後1時頃なんですが、その時間前後この付近で変わったことや気付かれたことはありませんか？」

「特には。あの、ニュースでは県外の人間の犯行だと言っていますが、そうじゃないんですか？」

高木が不思議そうに尋ねる。この質問も本日何回目だろうか、新田はオウムのように今までと同じ返事をする。

「形式的なことで、みなさんにも行っていることです。すべての可能性を調べるのが仕事ですから。」

高木の顔を見ると納得のいかない表情をしていたが、それ以上突っ込んでこないで先へ進むことにした。

「家に居たということは、車は使用しなかった、ということですね？」

「はい」

「最近使用されたのはいつ頃ですか？」

「3日前に買った物で使ったぐらいですが。」

「ということは3日前から今日までは少なくとも使用はしていないということですね。3日前以前から先週の水曜日まではどうですか？」

「うん、使っていないと思います。普通の買った物は歩いて行きま

すし。」

高木は腕を組み考えていたが、思い当たらないようだ。

「なるほど、有難うございました。最後に、車を調べさせてもらえますか？」

「はあ、こちらです。」

高木は一瞬顔をしかめたが、素直にに応じてくれた。

「今日は冷えますね。車の調査は私一人です。高木さんは家の中でくつろいでいて下さい。調査が終わったあと、またご連絡します。」

懐中電灯を取り出し、明かりを点けてから高木の方を振り向き言った。高木は「では」と返事し、部屋に入ってしまった。これで、集中して調査できる。初めに行った家なんかは色々と聞かれて調査どころじゃなかったもんな。あそこでかなり時間をロスしたんだよ、おっと文句を言ってる場合じゃない、早く調査せねば。懐中電灯を口に挟み、手帳を用意した。

- ・ 横窓全部にスモークが張られている
- ・ 車体上側部、窓にほこりが付着（使用頻度は少ないと思われる）
- ・ 車体右側部下に擦ったような跡
- ・ ヘッドライト右部にひび割れ
- ・ ナンバープレートの周りにベト付きがある
- ・ 前輪右、後輪左に黒い石が挟まっている
- ・ 前輪右にガムが引っ付いている
- ・ 後輪左右に黒い粘性のある液体（スモーク）が付着

「大体こんなところか」

パタン、と手帳を閉じた音がやけに大きく聞こえる。そこへ、待ちくたびれたのか、高木がこっちに向かってきた。

「どうですか、調査の方は？」

「たった今、終わったところです。今日はどうも有難うございました

た。又、協力をお願いするかもしれませんが、その時はよろしくお願ひいたします。」

丁寧にお辞儀して、その場を去った。

高木は段々小さくなっていく刑事の姿を、その形が消えるまで見ていた。冷たく鋭い視線を宿して。

「あゝあ、今日は疲れたな。30過ぎるとガタツとくるって言うけど、本当だな。」

新田は歩きながら両腕を回し、首を左右に振りながら独りごちる。しかし、捜査の方向性が見えてきたことで気分の方は晴れてきた。夜空を見上げ、小さく光る星の数を数えながら家路についた。

容疑者の思惑

「なんなんだよ、幾らなんでも早すぎる。」

ボタン、と勢いよくドアを閉めた後、高木は吐き捨てるような口調で毒づいた。ニユースではA県を中心に捜査してると言っていたじゃないか、それともこちらを油断させるための罠だったのか。

足早にキッチンへ行き、冷蔵庫の中にあるミネラルウォーターを飲み、大きく息を吐く。

落ち着け、そして今の状況を整理するんだ。さつき来た奴 新田とか言ったか は事件翌日に来た警官とは明らかに違う。最初に来た警官は事務的に処理している感じがありありと見受けられたが、今日の奴は明らかに俺を捜査対象に入れている『刑事』だ。

なぜこんなに早く絞り込めるんだ？いずれ俺のところにも捜査の手は及ぶとは思っていたが、それはもつと先の話で、その頃には証拠を全て消した後で、捜査内容も笑って済ませることができる様なものになっていなければいけなかったんだ。

仕掛けた罠に不備があったのか？いや、至って順調にことを進めたはずだ。現にこの一週間は付近の捜査には熱を帯びていなかったし、確実に県外犯説に傾いていた。それが今日、正確に言えばほんの数分前、急に風向きが変わった。警察内部に頭の回転の速い奴がいるのか、それともこんな陳腐なトリックでは警察は騙せないということがあるのか。

今思えば、多少近所から怪しまれてでも洗車ぐらいはしておくべきだったか。まさか、これほど早く捜査の手が及んでくるとはしかし、後悔ばかりしてられない。次の手を、策を練らなければ。高木はキッチンを出て、部屋のソファに腰を下ろした。

思えば今日来た刑事にしたって、なんかのんびりしていて間抜けそうな感じで本気度は感じなかった。しかも、この付近の該当車全て調べてるってことは、完全に絞りきれてはいないことを意味して

いる。つまり、今日の聞き込みは犯人を燻り出すための『揺さぶり』の可能性が高い。捜査内容を曖昧にしていたのも、車を入念に確認していたのも単なる演技なのだ。

だが、待てよ。仮に俺の車から証拠となる物質などが検出されれば、急激に捜査範囲は狭まってくる。今日の刑事は見ただけで、物証等は持ち帰ってはいないだろう。いや、俺の見ていないところでこっそり手に入れていたのかもしれない。車の調査をするときも意識的に俺を遠ざけようとしていた節が伺えたし、帰り際も何かぎこちなかった様な気がする。今から洗車やタイヤを交換することはリスクが高すぎるか。

動くか、否か。高木は、布団に入った後もなかなか寝付くことが出来なかった。

絞り込み1

ふう、まだ昨日の疲れが残っている。疲労回復に効く、と謳われているドリンク剤を飲んでも全く効能は感じられなかった。これも30代の為せる業か、何度もため息が出てしまう。

新田は昨日不在だった家の聞き込みを行っていた。幸いどの家も今日は居るみたいで、さらに昨日学んだことを踏まえていたので、スムーズに事が運べて午前中には終わっていた。

昼飯は、芝井の事務所で食うか。どっちにしる聞き込みの結果も報告しないといけないし、一石二鳥だ。どこかに持ち帰りできる店はないか、と辺りをキョロキョロ見渡しながら芝井探偵事務所の方角へ歩き出した。

「おい、新田だけど、入るぞ。」

事務所の前で大声を出してドアを開けると、芝井が椅子に腰掛け、机に足を放り出した格好で何やら考え事をしているようだった。俺に気付くと、ハツとしたように顔を向け「よう」と言っ、手を挙げて招き入れてくれた。中に入って、途中で買ってきた牛井の袋を机の上に置いたとき、何やら物音がしたので反射的にその方向へ顔を向けると、紙と対峙して何かを描いている女の子が目に入った。

「直美ちゃん！」

そう叫ぶと、直美ちゃんも今俺に気付いたようで「新田さん！」と叫び、手を止め駆け寄ってきたので、彼女を抱き上げた。

「久しぶりだなあ直美ちゃん、可愛くなっちゃって。いやあ、こんなに重くなったのかあ。」

この前会ったときは 3年ぐらい前か まだ小さくてまともな会話も出来なかった子供がここまで成長したのか、と純粹に喜ん

でいたのだが、直美はそう解釈してくれなかったみたいで、

「駄目だよ、新田さん。女性に重くなった、とか言っちゃあ。」

と、ふくれっ面になって、また紙のある方に行ってしまった。さらに、「そんな無神経なことを平気で言うから、未だに独身なのよ。」とブツブツ呟く声も聞こえてくる。

女性、か。女の子の成長は俺が考えているより遥かに早いらしい。苦笑いしながら芝井の対面にある椅子に腰掛けた。

「昨日行った調査の結果だ。」

34件分の資料を見せると、芝井は「ご苦労様」と言って目を通し始めた。

「これからどうするんだ？」

俺としても案はあるが、それは芝井の考えを聞いた後でいい。

「張り込むんだよ。」

「34人全員をか？」

驚いた様子を大げさな手ぶりで表現した。

「馬鹿。銀行員の証言や状況証拠でかなり絞れるはずだろ？今資料をざっと見てもそこまで不可能な人数にはならないはずだ。」

「バカ、だって。新田さん。」

いつの間にか俺の隣に来ていた直美が芝井の真似をする。

「まあ、気にすることはない。一人一人慎重に消していこう。」
と、芝井。

「ドンマイ、新田さん。」

と、直美。

アハハ、泣きそうになってきた。

「え」と、銀行員の証言からいくと身長165から170cmの肉中背の男性、か。」

気を取り直して、記録内容を読み上げる。

「男性、というのは、とりあえず除外しておこう。あくまでも銀行員の印象論だからな。後は状況、すなわち該当車が犯行に利用できる状態だったか、という事と持ち主のアリバイを確認することで対

象者はかなり絞られてくる。」

この発言を合図に、俺と芝井は34件の選別作業を始めた。この作業を誤ってしまうと、今までの苦労が水の泡になる。いつも以上に集中して取り組まなければなるまい。

予想以上に時間がかかってしまった。小さな情報も逃してはならない、という潜在意識が慎重にさせるのだろう。

昼飯に、と買ってきた牛丼はすでに冷たくなっていた。

絞り込み2

「ふう、やっと終わったな。」

肩を上下させながら話しかけた。芝井も疲れたようで肩をトントンと拳で叩いていた。

直美ちゃんが気を利かせて淹れてくれたコーヒーを飲んで休憩している途中、芝井は何かを思い出したかのように、

「そういえば、直。お前、塗り絵の方は終わったのか？」

と言い出した。テレビを観ていた直美は、呆れたような口ぶりで答える。

「そんなの、とっくに終わってるよ。有たち、何時間その紙とらめっこしてたと思ってんの？」

芝井も直美ちゃんには弱いようだ。だが塗り絵って。

「そうか。よし、じゃあここに持って来てくれるか。」

直美は、待ってました、とばかりに足早に取りに行く。

「えっ？それって、捜査に関係あるの？」

そう尋ねずにはられない。

「大ありだよ、ねー。」

直美ちゃんが紙を片手に持ち、得意げな顔で芝井を見る。芝井も、うんうん、と頷いていた。どういうことだ。

「昨日、事件のあった場所とその周辺を歩いてみたんだ。それを地図、というか絵にして描いたんだ。そしたら直が『色を付けた方が見やすいんじゃない？』と助言をくれたんで、そうしてもらったんだ。」

芝井が補足してくれたおかげでやっと経緯は理解できた。でも、余計に解かり難くなってるんじゃないだろうな、と勘繰りながら絵を見てみると、郵便局の地図記号を記していたり、佐野老人が目撃した場所の道路は最近舗装した道路だ、と解かる様に黒色に塗っていたり、予想に反して上々の出来栄であった。10歳恐るべし、と

感心した。

「さつき俺たちが選別して該当する人たちと、この地図とを照らし合わせると、さらに対象人数を絞ることができるんだ。」

「そんなことが出来るのか？」

さっぱり解からない。芝井はそれを見越していたのか、詳細を説明してくれた。

「いいか、逃走車が急発進して佐野氏の居たところに向かって来たということは北向きに逃げ、そしてその十字路を曲がったと言うことは西向きに進路をとったということだ。さらに佐野氏が追いかけた先の角を曲がっているのだから、再度北向きに逃走した、ということになる。」

芝井は地図を指でなぞって説明した。

「そうすると、事件現場である銀行を中心に見て南側、或いは東側に住んでいる対象者は除外できる。犯人からすれば、いち早く安全な場所に行き覆面や服を隠蔽したいと考えるだろうし、何より目撃者たちに『全速力で橋に向かった』と思わせなければいけないので、銀行から遠ざかる経路としてはある程度『橋までの最短経路』を選ぶ必要がある。言い換えれば『犯人は後戻りや回り道をするルートを取ることができない』と言うことができる。」

「はあ、そういうことか。いつもながら芝井の推理力には感嘆してしまう。」

「なるほど。そうなるとこの人とこの人は外して、すげえ！4人にまで絞れた！」

「だろ？あとはその人たちを見張って一人ずつ消していけば、犯人に辿り着くことが出来る。」

芝井は俺が持ってきた資料を整理し、手渡してくれた。だが、疑問はまだ残る。

「そんな簡単に尻尾を見せてくれるかな？」

「ここからは忍耐勝負だ。前にも言ったが、この事件の犯人は馬鹿ではない。安易に墓穴を掘るような真似はしてこないだろうし、お

前が聞き込みを行った後でなんらかの善後策は練っているはずだ。」
「じゃあ、聞き込みに行かない方が良かったんじゃないか？みすみす犯人に考える時間を与えてしまっている。」

そう主張したが、芝井は首を横に振り、笑みを浮かべながら答える。

「逆だ。聞き込みに行くことで種を蒔いたんだ。犯人の心の中に『不安』という種を。そしてそれは、やがて芽吹き、花を咲かせる。」
抽象的で全く理解できない。

「もう少し解かり易く説明してくれ。」

「ああ、失礼。仮にお前がこの事件の犯人だとする。二ユーヌや新聞を見る限りでは、作戦は成功した。あとは、ほとぼりが冷めた頃に車を処分してしまえば何の痕跡もなくなり完全犯罪の完成だ、とほくそ笑んでいた矢先に刑事が事件についてあれこれ聞き込みを行ってきたらどう思う？しかも捜査内容は適当にはぐらかされた拳句、自分や車のことは詳しく調べてくる。犯人は人生の大勝負をしているんだ、不安にならないはずはない。警察はどう考えているんだ、もうすでに俺が犯人だってバレてるんじゃないか、と疑心暗鬼にもなるだろう。初めのうちは冷静でいられるかもしれないが、徐々に不安が大きくなり破裂寸前にまで膨らんでくる。やがて動かざるを得ない状況にまで追い詰められて、チェックメイトだ。」

芝井はチェスの駒を置く振りをした。

「なるほど。しかしこれでは犯人の出方を待たつていう、受身の作戦になつちまうな。何とか犯人を引きずり出す妙案は無いか？この事件にだけ構ってられないんだ。」

困ったような顔になり、芝井に頼み込む。芝井のほうを見ると、困惑した表情を浮かべているのではないか、という俺の予想をいとも簡単に裏切るかのように涼しげな顔をしていた。

「それが、あるんだよ。こちらから攻め立てる方法が。」
「ぜひ、教えてくれ！」

芝井の言葉に被せるようにして叫んだ。芝井は急かす俺をたしな

めるのかように、ゆっくりとコーヒーを飲んだ後、これまたゆったりとした口調で話し始めた。

「それはな。」

芝井が小声で話すもんだから、逆にこっちが悪巧みをしているのではないか、という錯覚に陥り、話の途中で何度も笑いそうになった。

苦惱

寝不足の日が続く。

「あいつのせいだ。」

高木は聞き込みのあった日からずっと同じ台詞を吐いている。

あの夜、寝ずに考えた末に出した答えは『静観』、警察の次の出方を伺おうという結論に至った。まだ俺だけを標的にしているわけではあるまいし、県外説を捨てたわけでもないだろう。樂觀的過ぎるか？いや、ここで下手に動くとなんか全ても終わる。慎重に警察の動きを見極めることが最優先だ。

キッチンへ行き、パンを食べようと戸棚を開けると、中には何も入っていないかった。

「しまった。昨日で食べ切ってしまったのか。」

舌打ちしながら、戸棚を閉める。

あの日以来、ほとんど外出しなくなった。外にいる全ての人間が俺の方へと視線を向けているように思えて、又外に出た途端、俺が外出中に家の中にある金を狙っているんじゃないだろうか、と気が狂いそうになる。

しかし、食料が尽きつつあるこの状況下では、そうも言ってもらえない。出来るだけ目立たない格好をして、普段は身に付けない帽子を目深に被り、玄関のドアを開けた。

「179円のお返しとなります。」

店員が言い終わる前につり銭を奪うように掴み取ってレジを通過し、買った物を片っ端から乱雑に袋に詰めて、スーパーの自動ドアを通り抜けた。

よし、これで一週間は外出しなくて済む。これをあと何回か、何事も無く続けることが出来れば、俺の勝ちだ。

早く時が経つてくれ、早く車を処分させてくれ。呪文のように何度も繰り返しながら早足で歩いてきた。自宅まであと500m、400m、300m。この先の角を曲がると、もうすぐそこだ。と、曲がろうとした瞬間、見知った顔が目飛び込んできた。あれは、あいつは。

「あれっ？確か、高木さんでしたよね？覚えていらっしやいませんか、先日聞き込みの方をやらせて頂きました新田です。」

気付かれてしまった。逃げたいのは山々だが、こちらの思いとは裏腹に相手は足早に近づいてくる。「覚えていませんか」だと。お前の顔を忘れるはずが無い。お前のせいで俺は。

「いやあ、奇遇ですね。お買い物ですか？今日は天気も良いですし、風も心地良いですし最高ですね。」

笑顔が鼻に付いて不快な気持ちに拍車がかかる。それにしても奇遇だと、はたしてそうなのか？尾行されてたんじゃないだろうな？それに、なぜここにいる？

様々な疑問が飛び交い混乱しつつも、この質問だけはしておかなければならない。

「事件に進展はありましたか？」

出来るだけ平静を装いながら尋ねてみる。

「いやあお陰様で、もう少しで解決できそうです。あとは聞き込みの時に採取した車の付着物の検査結果さえ出れば、犯人逮捕で一件落着ですよ。」

刑事は晴れやかな様子で答える。その眼は、全てを、俺の心を見透かしているように見えた。

「そうですか。では、私は急ぎますので。」

「お引止めしてすみませんでした。お気を付けて。」

逃げるようにその場から離れた。自宅に戻るまで、早足が小走りになり、小走りが駆け足になり、最後は全速力で走って、家の前に

着いた頃には完全に息が上がっていた。

玄関のドアを閉めるなり、買い物袋を投げ捨てて、そこら中の物に当たり散らした。花瓶や傘や小さな置物は次々と倒れ、壊され、割れていった。

くそつ、くそつ、くそつ！ アイツめ、あの野郎め！ 澄ました顔で俺を虚仮にしゃがって！ もう直ぐ逮捕できる、だ？ やれるもんならやってみろ！

肩で息をして、よろめきながら部屋に入ると、傍らにあるバッグを開けて中身を見た。

これは俺の金だ！俺のものなんだ！誰にも渡さねえ、誰にも触らせやしねえ！

くそつ、どうすれば、どうすればいい。

高木は興奮状態から解けると、一転して放心状態になりポカんと口を開けながら、窓から見える空を見上げていた。しかし、そこから見えた景色は、高木の精神状態とは対照的に、どこまでも突き抜けるような秋空だった。

決意

どうすれば。

昨日は一睡も出来なかった。しかし何も考えることが出来ず、ただただ時間だけが過ぎていった。外がすでに明るくなっていることは、カーテン越しから差し込む光で十分わかる。

「もう7時か。」

高木はキッチンへ行き、昨日買ってきたパンを食べ、コップに注いだオレンジジュースを飲み干した。多少なりともホツとした気分になる。気持ちの重しが一つずつ取り払われる感覚を覚え、完全に鈍っていた頭の回転速度が上がっていくような気がした。

まだ、終わったわけではない。もう一度考えるんだ。残り少なくなった闘争心を奮い立たせて、状況を読み解こうとした。

あの刑事が「なぜ、あそこにいたのか？」「俺は尾行されていたのか？」なんてことは、もう調べようが無い。捜査上の関係で「偶然」あそこにおいて尾行はされていなかった、と希望的観測ではあるが、そう思うしかない。

次に、刑事との会話だ。奴はいつもながら詳細は言わなかったが、「事件に進展があった」、「聞き込みをした家の該当車に付着していた物質を調べれば、一件落着」と言っていた。

事件に何らかの進展があるのは、時間が経てば情報等が集まり整理されるだろうから当然のこととして、問題は「車に付着していた物質」のくだりだ。「聞き込みをした家の該当車」を詳しく調べているということは、完全に俺は捜査対象内に入っている。そして「車の付着物」を検査に回しているということは、やはり、あの聞き込みの時に何かを採取していたんだ。それで一件落着ということは、よほど決定的な物なのか。

いや、これも畏かもしれない。実は確たる物証など存在せず、犯人を、俺をおびき出そうとしている可能性も捨てきれない。

しかし、物証もそうだが他の観点から見ても、確実に捜査範囲は狭まってきていると考えていいだろう。俺は逃げ切ることができるのか、照準が定められつつある刑事の眼から。どうすれば、どうすれ。

突然頭の中の回路が途切れたような感覚に襲われ、その後は何も考えられなくなってしまった。

あれから、どれだけの時間が流れたのだろうか？ かるうじて繋ぎとめていた意識の中でぼんやりと考えた。

高木は、出頭することを決めた。

もしかしたらまだ逃げ切れる策はあるのかもしれないと思いつつも、もうすでに自分の精神状態が臨界点近くであることも理解していた。これ以上抗うと、本当に狂人になってしまう。

そう決断してからは、一気に心が楽になった。まるで心の中に押し掛かっていた大きな岩が、一瞬にして粉々に砕け散ったように晴れやかな気分だ。

この家にも当分帰ってこれそうにも無い。最低限の片付けや整理もしておくか。服は一番気に入っている服を着て行こう。でも行き先が警察署なのが風刺的で笑えるな。

よし、準備は出来た。玄関を出た途端、太陽の光を直視してしまい反射的に目を閉じた。しばらくしてから、ゆっくり目を開けて歩こうとすると、門扉の前に人影を見た。光を遮るように手をかざして確認すると。

「覚悟は固まりましたか？」

「新田 刑事」

新田が立っていた。訳がわからず激しく動揺したが、瞬時に冷静さを取り戻し発言の意味を悟った。『覚悟』と言っているのだから俺を捕まえに来たのだろう。俺はすでに勝負に負けていたんだ。

高木は脱力したように肩を落とし、自嘲的に笑いながらゆっくりと歩を進めた。

「意地悪な方だ、刑事さん。私の推理だと、あなた、友達少ないでしょう?」

負け惜しみのような言葉を刑事に浴びせかけ、パトカーが停まっている方へと歩いていった。

エピソード

「刑事さん、質問していいですか？」

パトカーに乗り込み、警察署に向かう途中で横に座っている新田に話しかけた。

「どうぞ。」

新田はこちらを見ようとはせず、無愛想に返事をした。

「なぜ、私が怪しいと思ったんですか？」

「ある人物の知恵を借りて捜査した結果、橋の内範囲の4人にまで容疑者が絞られました。そこからこの4人を吟味している際、ある事に気が付きました。佐野さんという方が逃走車を目撃しているのですが、目撃した場所の地面はごく最近舗装されたばかりの道路だったんです。新しく舗装されたアスファルトの石は真つ黒ですよね、しかもその液体は粘性を持っている。そこで4人の車を確認したところ、該当するのはあなただけでした。しかも、あなたに聞き込みを行ったとき、ほとんど車を使用していないという返事でした。だったら、液状のアスファルトはすっかり乾いて固まっていないとおかしい。従って、あなたはごく最近、車に乗って舗装された道路を通過したことになる。調べたところ、最近舗装工事を行っていたのは、あの場所しかない。これでほぼあなたが犯人に間違いないという確信を得ました。しかしこの情報の詳細はあなたに伝えなかった、3日前に買い物に行ったときに通ったとか、まるで今まで忘れていたことを思い出したかのように、そういうば昨日現場付近を通りました、なんて言い逃れをしてくることは目に見えていましたから。そこで昨日、偶然会ったふりをして、中途半端に情報を提供したんですよ。『頭の回転が速い』あなたの事だ、もう逃げ切れないと判断すると推測し、今日の午前中からあなたの家の前で待機していました。」

「やっぱり、昨日会ったのは罠だったんですね。」

悔しがるように下唇を噛んだ。

「トリックはどうでしたか？初動捜査の雰囲気は県外説に流れていったみたいでした。」

これは単なる興味本位の質問だ。知恵を振り絞って考えたトリックが警察を欺いていたかどうか、自分の力量が如何程か確認したかった。

苦労しました、と苦笑いしながら新田の口が動くことを期待したのだが、新田はあくまで無表情だ。

「合理的に計算されて、さらに心理の裏をついた、良く出来たトリックだったと思いますよ。しかし、このようなトリックは破られるためにあるようなもので、見破られてから破綻するまでの速度が速すぎるお粗末なものでした。」

この程度のトリックで鼻を伸ばすな、ということか。

「いやあ、それでも現役の刑事さんから『頭が良い』なんて言われると、不謹慎ですけど何だか嬉しくなりますね。」

逮捕されたことで気持ちが楽になったせいか、饒舌に話しかけてしまう。しかし、新田はそうではなかった。明らかに眼光が鋭くなっていた。

「勘違いしないで頂きたい。私はあなたのことを『頭の回転が速い』と言っただけで、『頭が良い』なんて言ったことも思ったこともありません。ここで言う『頭の回転が速い』というのは『小賢しい』や『姑息』という意味で、決して頭の良し悪しを評したものではありません。わかりますか？つまり私はあなたのことを軽蔑しているんです。そんなことも解からずに警察を欺けると思いませんか？」
今までと表情も口調も違う新田の雰囲気は驚き、戸惑っていたが、そんなことはお構い無しに新田は続ける。

「あなたはすでに、頭が悪い、という範疇に入ってしまったんですよ。なぜなら」

続く言葉を、固唾を呑みながら聞き入る。

「なぜなら、『本当に頭の良い人ならば、罪を犯そう、なんてことは考えません』から。つまり、罪を犯してしまっている時点で、あなたは頭が悪いんですよ。」

新田は鋭い眼光を外を、遠くの一点を見つめて、それから先は一言も口を開くことは無かった。

しばらくしてパトカーの回転灯が勢いよく回りだし、敗北者を町中に知らせるかのように、いつまでもいつまでも鳴り響いた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8331o/>

強盗犯を追い詰める

2010年11月23日19時10分発行